

群馬県高崎市江木町

江木舞台遺跡

分譲住宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2017

高崎市教育委員会
株式会社横尾材木店
有限会社歴史考房まほら

例 言

1. 本書は分譲住宅地造成に伴う江木舞台遺跡の埋蔵文化財調査報告書である。
2. 発掘調査及び整理作業は株式会社横尾材木店より委託を受けた有限会社歴史史考房まほらが、高崎市教育委員会による指導のもと実施した。
3. 発掘調査から整理作業に至るまでの費用負担は、株式会社横尾材木店によるものである。
4. 発掘調査の事項は下記のとおりである。

遺 跡 所 在 地：群馬県高崎市江木町字舞台 568-1、同 568-6、同 568-7、同 569-1、同 570-1、同 570-2

調 査 面 積：188㎡

発掘調査期間：平成 29 年 1 月 5 日～平成 29 年 1 月 24 日

整理調査期間：平成 29 年 2 月 1 日～平成 29 年 5 月 31 日

調 査 指 導：矢島 浩（高崎市教育委員会）

調 査 員：山崎芳春（有限会社歴史史考房まほら）

測 量 技 師：田中隆明（タナカ設計）

5. 本書の編集は山崎芳春が行い、それによって山際哲章（studio foglia）がデジタル編集を行った。執筆は第 1 章を矢島浩、第 2 章から第 4 章を山崎が担当した。
6. 出土遺物及び図面・写真などの資料は、高崎市教育委員会が保管している。
7. 発掘調査から本書の作成に至るまで、以下の方々に御教示・御協力をいただいた（敬称略・順不同）。
永井智教
8. 発掘調査及び整理作業の参加者は、下記のとおりである（敬称略・順不同）。

発掘調査：大澤貴紀・岡村美弥子・萩野響生・藤木 武・森本静江

整理作業：板垣陽子・川島かおり・宮崎昌子

凡 例

1. 座標地は世界測地系（第 IX 系）を使用した。挿入中の方位記号は座標北で、水準地は海拔標高（m）を示す。
2. 遺構略称は以下のとおりである。
溝：SD 土坑：SK ビット：SP
3. 遺構図・遺物図・写真図版の縮尺は各挿入中に付すスケールに準拠する。なお、基本縮尺は下記のとおりである。
遺構図：S=1/60、遺物図：S=1/3、写真図版：S=1/3
4. 遺構図中の線は、黒色の実線は遺構等、灰色の実線は標高、破線は掘削や推定線、一点鎖線は地山の下端である。
5. 遺物出土位置を示す記号は下記のとおりである。
取上遺物は●（ドット）で示し、「7（2）掲載番号（取上番号）」という形式で表記した。
6. 土層や遺物の色調は、農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修 2006『新版 標準土色帖』を参照した。
7. 土層説明における含有物の量は、観察者の目分量を基準に多（50% 以上）・中（50～25%）・少（25～5%）・微（5% 以下）で表記した。

目 次

例言・凡例・目次・抄録

第1章 発掘調査に至る経緯	1
第2章 遺跡の周辺環境	1
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	2
第3章 調査の成果	3
第1節 試掘調査・本調査の経過	3
第2節 基本土層	4
第3節 遺構と遺物	5
第1項 遺構	5
第2項 出土遺物	8
第4章 まとめ	9
附編 自然科学分析	11
写真図版	

挿図目次

第1図 井野川低地帯と前橋・高崎台地	1	第7図 As-B降下以前の遺構全体図	7
第2図 周辺遺跡図	2	第8図 As-B降下以前の遺構	7
第3図 調査区位置図	3	第9図 出土遺物	8
第4図 調査区の基本土層	4	第10図 江木舞台遺跡と遺構確認地表面	9
第5図 As-B降下以後の遺構全体図	6	第11図 江木舞台遺跡と 江木北土井遺跡の比較	10
第6図 As-B降下以後の遺構	6		

挿表目次

第1表 周辺遺跡一覧	2	第3表 基本土層注記	4
第2表 調査工程表	3	第4表 遺物観察表	8

写真図版

PL-1 遺構写真

PL-2 遺構写真(2)・遺物写真

第1章 発掘調査に至る経緯

平成28年10月に土地所有者である株式会社S Bと施工業者である株式会社横尾材木店から、高崎市江木町において計画している宅地造成工事に先立つ埋蔵文化財の照会が市教育委員会文化財保護課（以下、市教委と略）にあった。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である江木23遺跡に隣接しているため、工事に際しては協議が必要である旨を回答した。開発計画が具体化した同年10月4日には、市教委へ埋蔵文化財試掘（確認）調査依頼書と文化財保護法に基づく届出が提出され、同年11月2日に試掘（確認）調査を実施した。その結果、平安時代の水田跡に伴う畦畔を検出、埋蔵文化財の所在が明らかになった。この結果をもとに開発者と市教委で協議したが、現状保存は困難との結論に達し、発掘調査による記録保存の措置を講ずることで合意した。なお遺跡名については「江木舞台遺跡」とした。

発掘調査は「群馬県内の記録保存を目的とする埋蔵文化財の発掘調査における民間調査組織導入事務取扱要項」に順じ、平成28年12月14日に株式会社横尾材木店と民間調査機関有限会社歴史工房まほらとの間で契約を締結、また同日に株式会社横尾材木店・民間調査機関有限会社歴史工房まほら・市教委での三者協定も締結し、調査の実施にあたって市教委が指導・監督をすることとなった。

第2章 遺跡の周辺環境

第1節 地理的環境

本遺跡は、群馬県高崎市江木町にあり、標高約95m、井野川右岸に位置し、西を高崎台地、東を前橋台地に挟まれた井野川低地帯という呼ばれる低地域の西端に立地する（第1図）。遺跡が立地する低地帯は両台地との比高差は井野川下流域の烏川との合流地点周辺では7～8mほどとなるが、北西方向に向かって比高差は小さくなる。本遺跡地点は低地帯の北西部で比高差がほぼなくなり、かつ周辺地域の土地開発が進んだことから、高崎台地と井野川低地帯の境が不明瞭となる地域である。低地帯は前橋泥流堆積物や井野川砂礫層を被覆した層厚が数mの井野川泥流堆積物層を最上位に構成される。ただ、井野川低地帯の成因については現在のところ明らかになっていない（吉田・笠原2016）。井野川は井野川低地帯東端を流れ、左岸側が前橋台地となるため右岸側が氾濫原となり、河川は度々氾濫したようである。低地帯は微高地と後背湿地が複雑に形成され、本遺跡はこのような地理的環境に立地している。



第1図 井野川低地帯と前橋・高崎台地

第2節 歴史的環境

井野川流域には弥生時代から集落・墓域が広く営まれ、口高遺跡など西毛地域を代表するような遺跡が点在する。これらの遺跡は井野川沿いの微高地上に居住域を展開し、その後背湿地は生産域として主に水田として利用されてきた。本遺跡は試掘調査時に畦畔と推測される痕跡を確認したことで本調査に至った経緯があり、本遺跡周辺の水田を確認した遺跡について述べたい。

浅間 B 軽石（以下 As-B）下から水田が確認された遺跡は、江木北土井 (2)、上大類野地田 (3)、高関北沖 (4)、高関塚田 (5)、高関高根 (5)、高関東沖・村前 (7)、高関東沖 II (8)、岡久保 (10)、真町 I (12)、旭町 I (13)、東町 I～IV (14)、栄町 I・II (15)、岩押 I・II・III (16・17・18)、上中居平塚 II (19)、上中居早場 (20)、高関村前・村前 II (21)、上中居辻薬師 (22)、上中居 (23)、飯塚西金井 (25)、飯塚東金井 (26)、飯塚金井 (27)、飯塚十二前 (28)、飯玉 I (31)、稲荷町 I (32)、日光町 (34)、上大類八反田 (36)、上人類薬師 (38)、上人類北宅地 (39)、天田川押 (40)、天田 II (41) などがある。高関村前は古墳時代の畠跡が確認されている。上大類野地田、真町、旭町は As-B 軽石下水田の下から洪水堆積層に覆われた水田が確認されており、奈良時代～平安時代初期から水田が形成されていた。岡久保からは馬蹄痕が確認されている。

本地域よりも東側の一貫堀川をさらに下った柴崎地区では As-B 軽石によって覆われた条里地割による水田が確認されている。



第1表 周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	江木舞台遺跡 (本調査)	11	江木諏訪西遺跡	21	高関村前・村前 II 遺跡	31	飯玉 I 遺跡	41	天田 II 遺跡
2	江木北土井遺跡	12	真町 I 遺跡	22	上中居辻薬師 II 遺跡	32	稲荷町 I 遺跡	A	江木廻濠遺跡
3	上大類野地田遺跡	13	旭町 I 遺跡	23	上中居遺跡群	33	只沢・天神遺跡	B	貝沢八幡屋敷
4	高関北沖遺跡	14	東町 I～VI 遺跡	24	上中居一丁目遺跡	34	日光町遺跡	C	塚越屋敷
5	高関塚田遺跡	15	栄町 I・II 遺跡	25	飯塚西金井遺跡	35	五霊神社古墳	D	上大類新井屋敷
6	高関高根遺跡	16	岩押 I 遺跡	26	飯塚東金井遺跡	36	上人類八反田遺跡	E	岡田屋敷
7	高関東沖・村前遺跡	17	岩押 II 遺跡	27	飯塚金井 II 遺跡	37	貝沢・柳町遺跡	F	高関屋敷
8	高関東沖 II 遺跡	18	岩押 III 遺跡	28	飯塚十二前遺跡	38	上人類薬師遺跡	G	反町城
9	高関塚村遺跡	19	上中居平塚 II 遺跡	29	飯塚苗代遺跡	39	上大類北宅地遺跡	H	赤土屋敷
10	岡久保遺跡	20	上中居早場遺跡	30	貝沢・島遺跡	40	天田川押遺跡	I	鼠屋敷

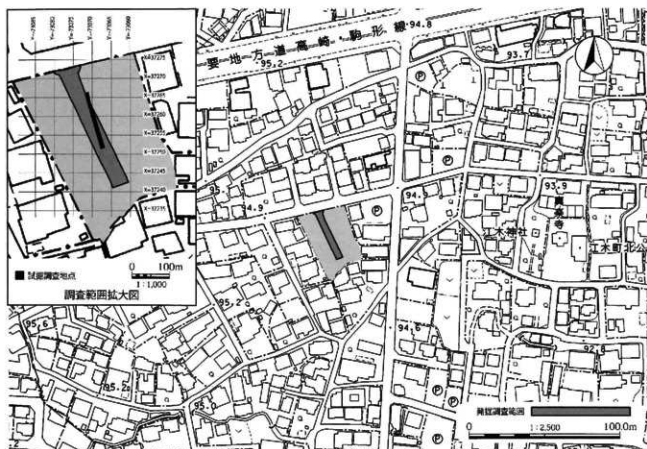
第2図 周辺遺跡図

第3章 調査の成果

第1節 試掘調査・本調査の経過

分譲住宅幼稚造成に伴う開発が江戸舞台遺跡に及ぶことになり、市教育委員会によって試掘調査が行われた。試掘トレンチを設定し（第3図）、遺構確認而まで掘り下げた結果、浅間Bテフラ（以降As-B）層直下で群状の痕跡が確認され、水田遺構を想定した本調査を行う運びとなった。

本調査は短期間のため調査対象範囲をAs-B直下近くまで重機で掘削を行った。部分的にAs-B下まで擾乱を受けている部分もあったが、埋蔵状態は良好であった。調査区北側ではAs-B層が明瞭に確認できたが、南側に向かうに従って、As-Bの堆積が薄くなり、調査区南東部分ではAs-Bを明瞭に確認できなくなり、As-B混合層まで掘削した。重機による表土掘削後からは、作業員によってジョレン・移植ゴテで掘り下げた。As-Bを取り除くと、試掘で予想された水田遺構は確認できず、調査区の大部分が溝であることがわかった。溝の全面調査は上期内に行うことは難しかったため、溝の南北に確認トレンチを設定して部分的に確認調査を行なった。調査区の全景撮影はドローンによる撮影を試みたが強風のため撮影ができず、脚立からの撮影となった。群状隆起は確認できたが、群かどうかは調査区内での判断は難しく、プラントオパールの確認など自然科学分析を依頼した。機材搬入から埋め戻しまでに11日を要した（第2表）。



第3図 調査区位置図

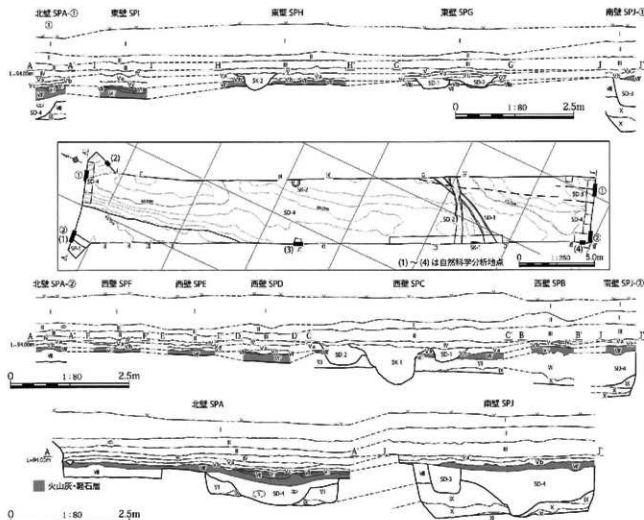
第2表 調査工程表

作業内容	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
機材等搬入																				
表土掘削																				
遺構確認																				
遺構調査																				
空掘																				
科学分析																				
機材等撤収																				
埋め戻し																				

第2節 基本土層

基本土層の観察は、調査区の断面と調査区南北壁で溝の確認のため設定した確認トレンチを利用し、10箇所で行った。土色・土質・構成物を分類基準にⅠ層～Ⅺ層まで分層し、漸移的な層は上位の層に含め、層のローマ数字にa、b、cとこのように小文字アルファベットを付した。Ⅶ層は、大治三年（1128年）の浅間山噴火を給源とする浅間柏川テフラ（As-Kk）層、Ⅶ層は、天仁元年（1108年）の浅間山噴火を給源とする浅間Bテフラ（以下As-B）層である。基本土層から各層の地形を観察すると、南方向に向かって緩やかな登り傾斜となっているようである（第4図）。また、部分的に層の厚さや堆積構成が異なる部分があり、部分的な微高地・微低地が形成されていたと推測する。

基本土層の内容は、第3表を参照してもらいたい。Ⅰ層は現地表土で埋め土や碎石で構成される。Ⅱ層は暗青灰色の逆グライ化したような層で、現代遺物が含まれていた。本層までが現地表土である。Ⅲ層以下が遺構・遺物包含層となる。



第4図 調査区の基本土層

第3表 基本土層注記

図面名	遺構名	遺構番号	注記番号	土色	しまり	結核	土質	含有物・備考
東壁 SPG	東壁	SPG	I	表土				碎石・盛土など
北壁 SPA	北壁	SPA	II	暗青灰：10YR3/1	強	微	粘質土	
北壁 SPA	北壁	SPA	III	灰黄灰：10YR6/2	あり	あり	粘質土	IV 層にじり
北壁 SPA	北壁	SPA	IV	にぶい黄褐：10YR5/4	あり	微	粘質土	VI 層の土壌：中微
北壁 SPA	北壁	SPA	Va	黒褐：10YR3/2	あり	微	粘質土	VI 層の土壌：中微
北壁 SPA	北壁	SPA	Vb	黒褐：10YR3/2	あり	微	軽石含粘質土	As-B 灰と軽石混合層
北壁 SPA	北壁	SPA	Vc	微：7.5YR6/8	あり	微	軽石含粘質土	As-B 軽石
東壁 SPI	東壁	SPI	VI	青灰：5B6/1	あり	微	火山灰	As-B 軽石
東壁 SPI	東壁	SPI	VI	にぶい黄褐：10YR5/4	あり	微	火山灰含軽石	As-B 軽石
東壁 SPI	東壁	SPI	VI	黒灰：10YR6/1	微	なし	軽石	As-B 軽石
東壁 SPG	東壁	SPG	Va	灰：10Y5/1	あり	微	軽石含粘質土	As-B 軽石：中、VIII 層との漸移層
南壁 SPJ	南壁	SPJ	VIII	青灰：10B6/5	微	微	粘質土	
南壁 SPJ	南壁	SPJ	IX	青灰：10B2/1	微	微	粘質土	
南壁 SPJ	南壁	SPJ	X	微：7.5YR6/8	微	微	軽石含粘質土	沈降した部分で形成された層
南壁 SPJ	南壁	SPJ	XI	暗青灰：10B4/1	微	あり	シルト質土	砂混合

第3節 遺構と遺物

第1項 遺構

本調査によって As-B 降下以前と以後の遺構が確認された。As-B 降下以後の遺構は、溝2条 (SD-1・2)、土坑2基 (SK-1・2)、ピット基 (SP-1) である (第5図)。As-B 降下以前の遺構は、溝2条 (SD-3・4)、群状隆起である (第7図)。

1. As-B 降下以後の遺構 (第6図)

1号溝 (SD-1)

形成時期：基本土層 V a 層からである。規模：遺構は調査区外に広がり、調査区内での規模となる。全長 5.5m、確認面より計測して幅 0.5m ~ 0.7m、深さ 22cm ~ 28cm。平面形状：北方向に緩やかに湾曲しながら N27° E 方向に走る。断面形状：箱状である。切合関係：SD-2 に切られている。調査所見：堆積覆土には明確な水成堆積の痕跡はみられない。確認断面からは自然形成されたとは想定できず、人為的に形成されたと推測する。

2号溝 (SD-2)

形成時期：基本土層 V a 層からである。規模：遺構は調査区外に広がり、調査区内での規模となる。全長 4.4m 確認面より計測して幅 0.5m ~ 0.6m、深さ 26cm ~ 46cm。平面形状：北方向にやや緩やかに湾曲しながら N60° E 方向に走る。断面形状：箱状。調査所見：堆積覆土には明確な水成堆積の痕跡はみられない。確認断面からは自然形成されたとは想定できず、人為的に形成されたと推測する。

1号土坑 (SK-1)

形成時期：基本土層 V a 層からである。規模：確認面より計測して幅 1.7m、深さ 0.6m。平面形状：調査区外西側にのびる。形状は不明である。断面形状：U 字。切合関係：SD-2 を切っている。

2号土坑 (SK-2)

形成時期：基本土層 V a 層からである。規模：長軸不明、短軸 0.5m 確認面より計測して深さ 34cm。平面形状：調査区外東側に伸びる、確認できている平面形状から長楕円形と推測する。断面形状：U 字形。

1号ピット (SP-1)

形成時期：基本土層 V b 層からである。規模：平面的に確認できなかったため長短軸不明だが、断面から幅 15cm。確認面より計測して深さ 10cm である。平面形状：不明。北側壁面の断面から確認でき、調査区外北側にさらにのびる。断面形状：U 字形。

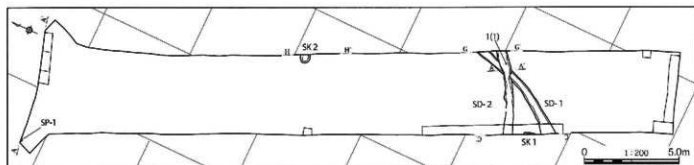
2. As-B 降下以前の遺構 (第8図)

3号溝 (SD-3)

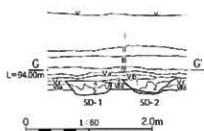
形成時期：基本土層 VII 層下からで、As-B 降下以前の遺構あり、降下以後は機能していなかったようである。南壁確認トレンチの断面の上層観察によって確認できた。規模：遺構は調査区外に広がる。全長は平面で確認できなかったため不明、確認面より計測して幅 0.7m、深さ 0.6m。平面形状：平面的な広がりとは本調査で確認することができなかったが、確認トレンチでの観察状況からほぼ N19° W 方向に走ると推測する。断面形状：箱状。切合関係：SD-4 を切る。調査所見：堆積覆土はグライ化した土壌である。明確な水成堆積の痕跡はみられない。確認トレンチから基盤土層を確認すると VII 層以下はグライ化した土壌と推測でき、湿地帯であったようである。基盤土層には自然流路にみられるような砂礫の堆積がみられないことから溝は人為的に形成された可能性がある。

4号溝 (SD-4)

形成時期：基本土層 VII 層下からで、As-B 降下以前の遺構である。ただ北壁確認トレンチ部分の土層断面から、基本土層の V 層が複数層形成されたことから、埋没後も微低地を形成していたようである。規模：遺構は調査区外に広がり、調査区内での規模となる。全長 33m、確認面より計測して北壁確認トレンチでは幅 2.8m、深さ 0.7m、南壁確認トレンチでは幅 2.8m、深さ 1m、いずれも両肩を完全に確認できていないため、幅は現状で計測できる数値である。溝の底の標高値は、北端 92.92m、南端で 93.04m、最深部で 92.72m と南端へ向かってやや傾斜して下っているようだが、部分的な地形の差である可能性がある。平面形状：調査区の大半を占め、平面的な広がりとは本調査区外に広がり、全容を確認することができなかったが、N19° W 方向に走る。断面形状：北端と南端で異なり、北端は段丘状に 1 段が形成され底面は毛抜状である。南端は東側の肩は SD-3 に切られ、西側の肩は調査区外のため立ち上がりは不明であるが、東側

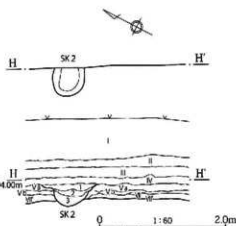


第5図 As-B降下以後の遺構全体図



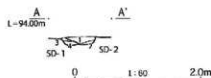
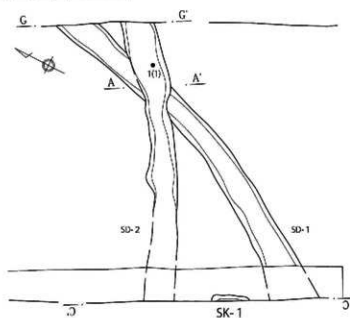
東壁 SPG 土層注記

No	遺構	土色	しまり	粘性	含有物・備考
1	SD-2	黒褐色	強	あり	As-B層：少
2	SD-2	黒褐色	強	強	As-B層：少
3	SD-2	黒褐色	強	なし	As-B層：少
4	SD-1	黒褐色	強	なし	As-B層：少
5	SD-1	黒褐色	強	強	As-B層：少



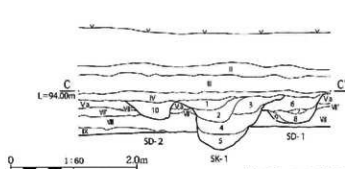
東壁 SPH 土層注記

No	遺構	土色	しまり	粘性	含有物・備考
1	SK-2	黒褐色	強	弱	As-B層：強、粘質土ブロック状に凝：少
2	SK-2	黒褐色	強	弱	As-B層：強、粘質土ブロック状に凝：少
3	SK-2	黒褐色	強	なし	As-B層：強、粘質土ブロック状に凝：少



SK-1・2 SPA 土層注記

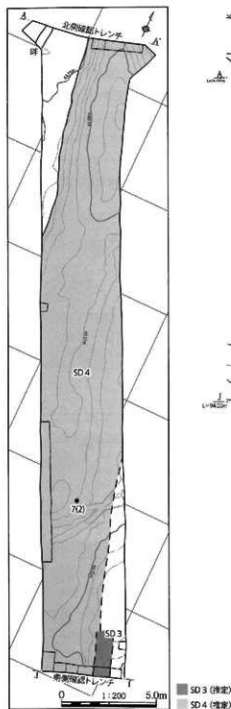
No	遺構	土色	しまり	粘性	含有物・備考
1	SD-2	黒褐色	強	あり	As-B層：少
2	SD-2	黒褐色	強	強	As-B層：少
3	SD-1	黒褐色	強	なし	As-B層：少
4	SD-1	黒褐色	強	強	As-B層：少



西壁 SPG 土層注記

No	遺構	土色	しまり	粘性	含有物・備考
1	SK-1	黒褐色	あり	あり	As-B層：強
2	SK-1	黒褐色	あり	あり	As-B層：強
3	SK-1	黒褐色	あり	あり	As-B層：強
4	SK-1	黒褐色	あり	あり	As-B層：強
5	SK-1	黒褐色	あり	あり	As-B層：強
6	SD-1	黒褐色	強	弱	As-B層：少
7	SD-1	黒褐色	強	弱	As-B層：少
8	SD-1	黒褐色	強	強	As-B層：少
9	SD-1	黒褐色	強	強	As-B層：少
10	SD-2	黒褐色	強	あり	As-B層：少

第6図 As-B降下以後の遺構

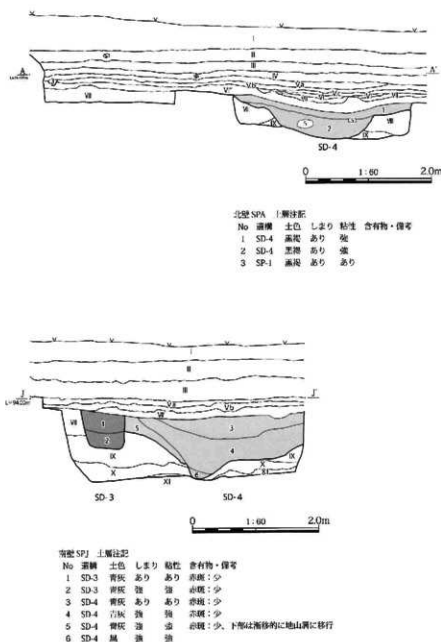


第7図 As-B 降下以前の遺構全体図

では緩やかな平坦を形成して立ち上がるような形状のため北端同様に段丘状になっている可能性がある。底面の一部は深く落ち込む。調査所見：堆積層上から、溝の底部に砂泥がみられ、流水の痕跡がうかがえる。確認トレンチから基盤土層を確認するとⅧ層以下はグライ化した土壌で、湿地帯であったようである。基盤土層には自然流路にみられるような砂礫の堆積がみられないことから溝は人為的に形成された可能性がある。

群状隆起（群）

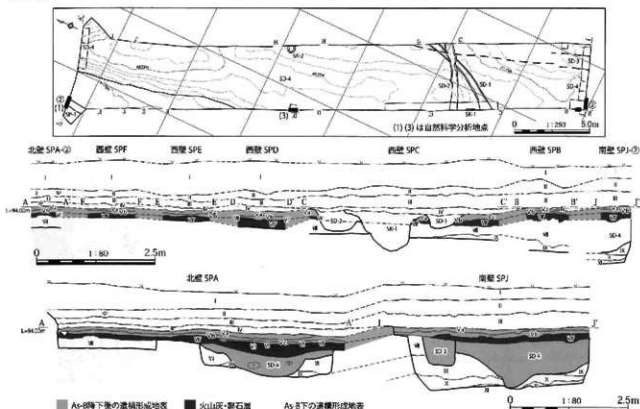
形成時期：基本土層Ⅷ'層下で、As-B 降下以前の遺構である。規模：遺構は調査区外に広がり、調査区内での規模となる。全長 1.2m、幅 48cm、高さ 5cm。平面形状：平面的な広がりとは本調査で確認することができなかったが、確認状況から N6°E 方向に走ると推測する。断面形状：台形状。調査所見：調査区北西端に地形の隆起を確認し、群の可能性はある。確認範囲が狭く、明確な判断ができなため、群状隆起とした。確認トレンチを入れて隆起部分の断面を確認したが、隆起部分と基本土層を分層できなかった。



第8図 As-B 降下以前の遺構

第4章 まとめ

今回の調査は、試掘調査時に想定された浅間Bテフラ（以下As-B）下の水田跡を明確に確認できなかったがAs-B降下以降に形成された溝・土坑などの遺構とAs-B下から幅約3m、深度約1mの南北に走る大溝と畦状の痕跡などの遺構を部分的ではあるが確認することができた。以下、今回の調査での成果と今後の展望について述べたい。



第10図 江木舞台遺跡と遺構確認地表面

1. As-B降下以後の状況

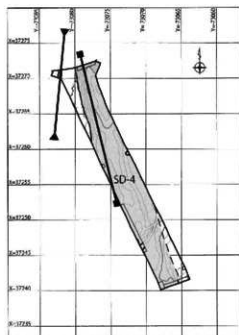
As-B下の大溝（SD-4）、As-Bや浅間粕川テフラ（As-Kk）が埋没した地表V層から遺構が形成されている（第10図）。遺構は東西方向に走る溝が2条（DS-1・2）、土坑が2基（SK-1・2）、ピットが1基（SP-1）を確認できた。ただ、SP-1はVb層上面から掘り込まれ、その他の遺構はVa層上面であることから時期差をもって遺構が形成されているのかもしれない。居住痕跡や田畑などの生産痕跡は認められず遺構の機能や形成目的は不明であり、状況は不明である。

2. As-B降下以前の状況

As-B降下以前の地表面V層上面から遺構が形成されている（第10図）。遺構は南北方向に走る溝が2条（SD-3・4）とSD-4の西側平坦面から確認できた畦状の隆起である。

畦状の隆起確認部分は調査区のわずかな部分であり、発掘調査で水田に伴う畦畔なのかどうかを判別することは困難なため、第10図の(1)(3)の地点で土層分析とプラント・オパール分析を行った（附属参照）。結果、両地点からイネのプラント・オパールが検出されるが、検出密度は稲作跡（水田跡）の分析結果と比較すると低い値で「イネの密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、および上層や他所からの混入が考えられる」と指摘された。稲作が行われた期間は不明であり、上層や他所からの混入は上層をAs-Bに覆われた地点であるための可能性は低いが、他の指摘は採集地点の状況と合致している。分析によってイネのプラント・オパールが確認されたという結果からSD-4と畦状の隆起地点は水稻耕作に伴う遺構である可能性が高いと指摘するにとどめたい。

最後に、水田耕作に伴う遺構の可能性があるので、周囲の条里水田遺跡との比較を行う。本遺跡の付近、東へ約400m離れた江木北土井遺跡の報告では、江木北土井遺跡の一部の畦畔は高岡岡久保遺跡から検出された大畦畔は市内で調査されている大八木水田遺跡・日高遺跡・西島遺跡群・宿人類遺跡群・柴崎遺跡群・矢中遺跡群と同一の方格地割



江木舞台遺跡



第 11 図 江木舞台遺跡と江木北土井遺跡の比較



江木北土井遺跡

であることを述べ、それらの条里地割の影響を受けている可能性を指摘している（土井 2015）。条里地割の影響を受けているとされた江木北土井遺跡の群は、南北群 1 と東西群 2・3・4 であり、本遺跡と比較できる対象としては、南北方向の群の群と SD-4 であり、江木北土井遺跡の南北群 1 と比較する（第 11 図）。その結果、群の走向と群の群はほぼ一致し、SD-4 は西方向に傾く。わずかな調査範囲での対比結果ではあるが、一致する要素は認められた。

3. 今後の展望

調査範囲の一部分からではあるが、本遺跡は条里地割の影響を受けた水田に伴う遺構を残した遺跡である可能性がある。本調査地点の周辺調査が行われた時、本稿の内容を再検討する必要がある。広範囲にわたる発掘調査を行えば、より詳しい当時の状況を確認できるが、本調査のような調査範囲であっても、積み重ねていくことが重要である。現時点での考察ではあるが、条里水田との関連を指摘できたことは非常に大きな成果である。今回の調査にご理解を頂いた株式会社横尾材木店には記して謝辞とさせていただきます。

参考・引用文献

- 日本ペドロロジー学会編 2000『土壌調査ハンドブック改訂版』博友社
- 永塚肇男 1997『藍色日本土壌生態図鑑』フジ・テクノシステム
- 土井道昭 2015『江木北土井遺跡』毛野考古学研究所
- 吉田英嗣・等原友生 2016「関東平野北西部、高崎台地から井野川低地帯にかけての地下地質」『地学雑誌』125(5)

附編 自然科学分析

1. 江木舞台遺跡の上層とテフラ

1. はじめに

関東地方北西部に位置する高崎市域とその周辺には、様名や浅間をはじめとする北関東地方とその周辺の火山のほか、中国地方や九州地方など遠方に位置する火山から噴出したテフラ（火山砕屑物、いわゆる火山灰）が数多く堆積している。そのうち、後期更新世に噴出したテフラの多くについては、層位や年代さらに岩石記載的な特徴がテフラ・カタログ（町田・新井、2011 ほか）などに収録されており、露頭や考古遺跡などで調査分析を行いテフラを検出することで、地形や地層の形成年代さらには考古学的な遺物や遺構の年代などに関する研究を実施できるようになっている。

高崎市江木舞台遺跡の発掘調査でも、層位や年代が不明な溝状遺構が検出されたことから、土地利用の復元を目的にした微化石分析（植物珪酸体分析）に先立って、まず野外調査（試料採取）を実施してテフラ層を含む土層の層位や、テフラ粒子の岩相の記載を行った。そして、高純度で採取したテフラ試料を対象に、テフラ分析（テフラ検出分析）を実施して指標テフラとの同定を行い、遺構や土層の層位や年代を明らかにすることになった。調査分析の対象は、北地点（溝西）、調査区東壁（溝内）、中央地点（溝内）、そして南地点深掘トレンチ（溝内）の4地点である。

2. 上層の層位

(1) 北地点（溝西）

溝状遺構の外（西側）に位置する北地点（溝西）では、下位より黒褐色土（層厚 5 cm 以上）、かすかに成層した灰褐色粗粒火山灰層（層厚 6 cm）、黒灰褐色砂質土（層厚 5 cm）、灰褐色砂質土（層厚 5 cm）、黄灰色土（層厚 9 cm）、砂混じり褐色土（層厚 13 cm）、灰白色軽石を多く含むやや青みがかった灰色土（層厚 19 cm、軽石の最大径 6 mm）、盛土（層厚 41 cm）が認められる（図 1）。

このうち、かすかに成層した灰褐色粗粒火山灰層は、層相から 1108（天仁元）年に浅間火山から噴出した浅間 B テフラ層（As-B、荒牧、1968、新井、1979）に同定される。また、上位より 2 層目に含まれる灰白色軽石は、その層位や岩相から、1783（天明 3）年に浅間火山から噴出した浅間 A 軽石（As-A、荒牧、1968、新井、1979）に由来すると考えられる。

(2) 調査区東壁（溝内）

調査区東壁（溝内）では、溝状遺構の埋積物を覆う As-B の上位の土層を詳しく観察できた（図 2）。本地点において、As-B の最上部は、下位より暗灰色粗粒火山灰層（層厚 3 cm 以上）、橙色細粒火山灰層（層厚 0.2 cm）、桃色砂質細粒火山灰層（層厚 2 cm）、灰白色粗粒火山灰層（層厚 0.8 cm）からなる。その上位には、暗褐色泥層（層厚 0.6 cm）を挟んで、成層したテフラ層（層厚 3 cm）が認められる。このテフラ層は、下位より灰褐色粗粒火山灰層（層厚 0.6 cm）、青灰色粗粒火山灰層（層厚 0.4 cm）、明るい青灰色砂質細粒火山灰層（層厚 2 cm）からなる。このテフラ層は、層位や層相から、1128（大治 3）年に浅間火山から噴出したと考えられている浅間粕川テフラ層（As-Kk、早田、1991、1996、2004）に同定される。

(3) 中央地点（溝内）

中央地点（溝内）では、下位よりやや暗い灰色泥層（層厚 11 cm 以上）、暗灰色泥層（層厚 7 cm）、成層したテフラ層（層厚 18.3 cm）、褐色砂層（層厚 2 cm）、青灰色細粒火山灰層（層厚 2 cm）、暗褐色砂質土（層厚 7 cm）、砂混じり灰褐色土（層厚 11 cm）、鉄分をやや多く含む黄灰色土（層厚 10 cm）、やや褐色がかった灰色土（層厚 16 cm）、やや青みがかった灰色土（層厚 13 cm）、盛土（層厚 58 cm）が認められる（図 3）。

このうち、成層したテフラ層は、下位より灰色砂質細粒火山灰層（層厚 0.3 cm）、基底部に褐色軽石を含むかすかに成層した褐色粗粒火山灰層（層厚 6 cm、軽石の最大径 7 mm）、橙色粗粒火山灰層（層厚 3 cm）、灰白色粗粒火山灰層（層厚 7 cm）、桃色細粒火山灰層（層厚 2 cm）からなる。このテフラ層は、層相から As-B に同定される。また、その上位の青灰色細粒火山灰層は、層位や層相から As-Kk に同定される。

(4) 南地点深掘トレンチ (溝内)

南地点深掘トレンチ (溝内) で認められた溝状遺構の埋積堆積物は、下位よりやや暗い灰色シルト層 (層厚 14cm)、暗灰色腐植質シルト層 (層厚 14cm)、やや暗い灰色シルト層 (層厚 31cm) からなる。観察時にさらに行われた深掘では、このうちの最上部のやや暗い灰色シルト層の基底部に、黄色凝灰質シルト層 (層厚 3cm) が認められた (図 4)。

さらにその上位には、下位より灰色軽石混じり暗褐色砂質土 (層厚 19cm, 軽石の最大径 4mm)、暗褐色砂質土 (層厚 5cm)、やや暗い灰色土 (層厚 32cm)、灰白色軽石混じり灰褐色土 (層厚 16cm, 軽石の最大径 3mm)、灰白色軽石を多く含むやや暗い灰色土 (層厚 7cm, 軽石の最大径 4mm)、盛土 (層厚 27cm) が形成されている。このうち、最下部の暗褐色砂質土に含まれる灰色軽石や粗粒火山灰は、側方へ追跡すると As-B にほぼ連続することから、As-B と考えられる。また、上部の土層に含まれる灰白色軽石は、層位や岩相から As-A と考えられる。

3. テフラ検出分析

(1) 分析試料と分析方法

調査区東壁 (溝内) で認められた As-B 最上部の明色の火山灰層と、As-Kk の構成粒子の違いを調べるため、また南地点深掘トレンチ (溝内) における溝状遺構の層位を明らかにするために、2 地点で採取されたテフラ分析試料のうちの 8 点を対象に、テフラ検出分析を行ってテフラ粒子の量や特徴を定性的に把握した。分析の手順は次のとおりである。

- 1) 分析対象試料について、砂分に応じて 1~8g を電子天秤で秤量。
- 2) 超音波洗浄装置により泥分を除去。
- 3) 恒温乾燥器により 80℃ で恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡で観察。

(2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を表 1 に示す。調査区東壁の試料 3 (As-B 最上部) には、淡灰色や淡褐色のスポンジ状軽石型ガラスが多く含まれており、褐色のものも認められる。磁鉄鉱などの不透明鉱物を除く重鉱物には、斜方輝石や単斜輝石が認められる。一方、試料 2 (As-Kk) には、淡灰色の軽石 (最大径 3.9mm) のほか、淡灰色、淡褐色、褐色、灰色、白色など多様な色調のスポンジ状軽石型ガラスが多く含まれており、それらが塊状や斑状に混じりあったものも認められる。磁鉄鉱などの不透明鉱物を除く重鉱物には、斜方輝石や単斜輝石が認められる。

南地点深掘トレンチ (溝内) で採取され、分析の対象となった試料のうち、溝状遺構の覆土から採取された試料 (試料 11~試料 2) からは、白色のスポンジ状軽石型ガラスが少量ずつ検出された。また、試料 11 および試料 8 では、良く発泡した灰白色のスポンジ状軽石型ガラスが少量ずつ認められる。これらの試料には、磁鉄鉱などの不透明鉱物を除く重鉱物としては、角閃石、斜方輝石、単斜輝石が認められる。溝の下位の試料 13 には、ほかの試料でも認められる中間型ガラスが少量含まれており、磁鉄鉱などの不透明鉱物を除く重鉱物に、斜方輝石、単斜輝石、そして角閃石が認められる。

4. 考察

調査区東壁 (溝内) で認められた As-B 最上部の明色の火山灰層 (試料 3) と、As-Kk (試料 2) では、構成粒子の粒度や、火山ガラスの色調の多様性に違いが認められる。この違いは、As-B と As-Kk のそれぞれの主体部に含まれる特徴の違いと同じものである。今回の調査分析で、すでに浅間火山周辺域や吾妻川流域の調査成果から指摘されているように (早田, 2014)、多くの火山学や考古学の関係者の中で、As-B 最上部とされている細粒の桃色火山灰層のさらに上位に明色の粗粒火山灰層が存在していること、そして As-Kk の下部が比較的粗粒のテフラ層で構成されていることが、利根川扇状地上で初めて確かめられた。

南地点深掘トレンチ (溝内) の溝状遺構から採取されたテフラ粒子のうち、遺構の覆土 (試料 11~試料 2) で検出された白色のスポンジ状軽石型ガラスや角閃石は、6 世紀初頭の榛名ニッ岳浅川テフラ (Hr-FA, 新井, 1979, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 2011 など) あるいは 6 世紀中葉の榛名ニッ岳伊香保テフラ (Hr-FP, 新井, 1962, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 2011 など) に由来すると考えられる。江木舞台遺跡付近でのテフラの粒度を考慮すると、

前者の可能性の方がより高いように思われる。

また、試料 11 や試料 8 に含まれる良く発泡した灰白色のスポンジ状軽石型ガラスは、岩相から 3 世紀後半に浅間火山から噴出した浅間 C 軽石（荒牧，1968，新井，1979，坂口，2010）に由来すると考えられる。これらのテフラとの関係から、溝状遺構中で認められた黄色凝灰質シルト層は、層位や層相から、榛名ニッ岳伊香保テフラの噴火に係属した火山泥流（ラハール）堆積物の可能性がある。

溝状遺構の覆土中に Hr-FA の一次堆積層や堆積層相があったことを示唆するようなテフラ粒子の濃集層相が認められないこと、覆土最下部からも Hr-FA に由来する可能性が高いテフラ粒子が検出されることを合わせると、溝状遺構の層位は、Hr-FA が流失したり、除去されていないかぎり、Hr-FA より上位と考えられる。

5. まとめ

高崎市江木舞台遺跡において、野外調査（地質調査・試料採取）とテフラ分析（テフラ検出分析）を実施した。その結果、浅間 B テフラ（As-B，1108 年）と浅間粕川テフラ（As-Kk，AD1128 年）の一次堆積層を認めることができた。そのほかにも、浅間 C 軽石（As-C，3 世紀後半）、榛名ニッ岳洗川テフラ（Hr-FA，6 世紀初頭）、浅間 A 軽石（As-A，1783 年）などに由来するテフラ粒子も検出した。発掘調査で検出された溝状遺構の層位は、Hr-FA より上位で、As-B より下位と考えられる。

文献

- 新井房夫（1962）関東盆地北西部地域の第四紀編年，群馬大学紀要自然科学編，10，p.1-79。
 新井房夫（1979）関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層，考古学ジャーナル，no.53，p.41-52。
 荒牧重雄（1968）浅間火山の地質，地研専報，no.14，p.1-45。
 町田 洋・新井房夫（1992）「火山灰アトラス」，東京大学出版会，276p。
 町田 洋・新井房夫（2003）「新編火山灰アトラス」，東京大学出版会，336p。
 町田 洋・新井房夫（2011）「新編火山灰アトラス（第2刷）」，東京大学出版会，336p。
 坂口 一（1986）榛名ニッ岳起源 FA・FP 層下の土師器と須恵器，群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」，p.103-119。
 坂口 一（2013）榛名ニッ岳洗川テフラ（Hr-FA）・榛名ニッ岳伊香保テフラ（Hr-FP）およびそれらに起因する火山泥流の堆積期間と季節に関する考古学的検討，第四紀研究，52，p.97-109。
 早田 勉（1989）6 世紀における榛名火山の 2 回の噴火とその災害，第四紀研究，27，p.297-312。
 早田 勉（1991）浅間火山の生い立ち，佐久考古通信，no.53，p.2-7。
 早田 勉（1996）関東地方～東北地方南部の示標テフラの諸特徴—とくに御岳第 1 テフラより上位のテフラについて—，名古屋大学加速器質量分析計業績報告書，7，p.256-267。
 早田 勉（2004）火山灰編年学からみた浅間火山の噴火史—とくに平安時代の噴火について—，かみつけの 皇博物館編「1108—浅間火山—中世への胎動」，p.45-56。

表 1 テフラ検出分析結果

地点	試料	軽石・スコリア			火山ガラス		重鉱物	
		量	色調	最大径	量	形態 色調		
調査区東壁（溝内）	2	*	淡灰	3.9mm	***	pm (sp)	淡灰, 淡褐, 褐, 灰, 白	opx, cpx
	3				***	pm (sp)	淡灰, 淡褐, 褐	opx, cpx
南地点深掘トレンチ（溝内）	2				*	pm (sp)	白	am, opx, cpx
	4				**	pm (sp), md	白, 淡灰	am, opx, cpx
	6				**	pm (sp), md	白, 淡灰	am, opx, cpx
	8	*	白	1.8mm	**	pm (sp), md	白, 淡灰, 灰白	am, opx, cpx
	11				**	pm (sp), md	白, 淡灰, 灰白	am, opx, cpx
	13				**	md	白	oox, cpx, am

****：とくに多い，***：多い，**：中程度，*：少ない。

bw：バブル型，pm：軽石型，md：中間型，sp：スポンジ状，fb：繊維束状。

ol：カンラン石，opx：斜方輝石，cpx：単斜輝石，am：角閃石。

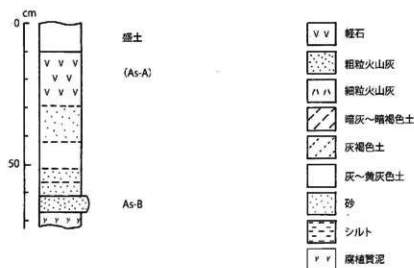


図1 北地点(溝西)の土層柱状図



図2 調査区東壁(溝内)の土層柱状図

●:テフラ分析試料の層位, 数字:テフラ分析の試料番号.

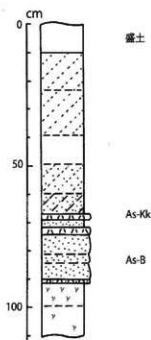


図3 中央地点(溝内)の土層柱状図

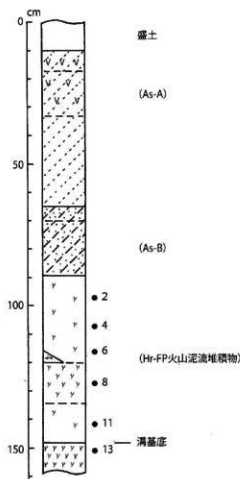


図4 南地点深掘トレンチ(溝内)の土層柱状図

●:テフラ分析試料の層位, 数字:テフラ分析の試料番号.



写真1

調査区東壁(溝内)・As-Kk(試料2)
淡灰色、淡褐色、褐色などの軽
石や、縞状軽石などが多く含まれ
ている。背後は1 mm メッシュ。

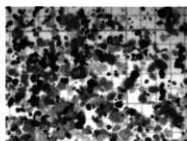


写真2

調査区東壁(溝内)・
As-B最上部(試料3)
淡灰色や淡褐色の細粒のスポン
ジ状軽石型ガラスが多く含まれて
いる。背後は1 mm メッシュ。

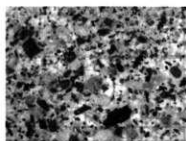


写真3

南地点深掘トレンチ(溝内)・
試料11
白色のスポンジ状軽石型ガラス
や角閃石が含まれている。背後は
1 mm メッシュ。

II. 江木舞台遺跡におけるプラント・オパール(植物珪酸体)分析

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸(SiO_2)が蓄積したもので、植物が枯れたあともガラス質の微化石(プラント・オパール)となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている(杉山, 2000)。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査(プラント・オパール分析)も可能である(藤原・杉山, 1984)。

2. 試料

分析試料は、中央地点(溝内)と北地点(溝西)から採取された2点である。試料採取層位を分析結果の柱状図に示す。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法(藤原, 1976)を用いて次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥(絶乾)。
- 2) 試料約1gに対し直径約40 μm のガラス・ビーズを約0.02g添加(0.1mgの精度で秤量)。
- 3) 電気炉灰化法(550℃・6時間)による脱有機物処理。
- 4) 超音波水中照射(300W・42kHz・10分間)による分散。
- 5) 沈底法による20 μm 以下の微粒子除去。
- 6) 封入剤(オイキット)中に分散してプレパラート作成。
- 7) 検鏡・計数。

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重(1.0と仮定)と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重)をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる(杉山, 2000)。

4. 分析結果

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

イネ、ヨシ属、キビ族型、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族A（チガヤ属など）、ウシクサ族B（大型）

〔イネ科—タケ亜科〕

ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、未分類等

〔イネ科—その他〕

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、未分類等

〔樹木〕

その他

5. 考察

（1）稲作跡の検討

稲作跡（水田跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体（プラント・オパール）が試料1gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している（杉山，2000）。なお、密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

中央地点（溝内）と北地点（溝西）のAs-B直下層について分析を行った。その結果、両試料からイネが検出された。イネの密度は、2,600個/gおよび2,000個/gと比較的低い値であるが、同層は直上をテフラ層で覆われていることから、上層から後代のものが混入したことは考えにくい。したがって、同層の時期に調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。イネの密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったこと、上層の堆積速度が速かったこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、および上層や他所からの混入などが考えられる。

（2）イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもムギ類、ヒエ属型（ヒエが含まれる）、エノコログサ属型（アワが含まれる）、キビ属型（キビが含まれる）、ジュズダマ属型（ハトムギが含まれる）、オヒシバ属（シコクビエが含まれる）、モロコシ属型、トウモロコシ属型などがあるが、これらの分類群はいずれの試料からも検出されなかった。

（3）植物珪酸体分析から推定される植生と環境

そのほかの分類群では、ヨシ属、ススキ属型、ウシクサ族A、ネザサ節型が比較的多く検出され、キビ族型、ウシクサ族B、樹木（その他）なども認められた。おもな分類群の推定生産量によると、ヨシ属が優勢となっている。なお、中央地点（溝内）と北地点（溝西）では、明瞭な差異は認められなかった。

以上の結果から、As-B直下層の堆積当時は、ヨシ属が生育するような湿潤な環境であったと考えられ、そこを利用して調査地点もしくはその近辺で水田稲作が行われていたと推定される。また、周辺の比較的乾燥したところにはススキ属、ウシクサ族、メダケ属（ネザサ節）などのイネ科草本類が生育しており、遺跡周辺には何らかの樹木が分布していたと推定される。

6. まとめ

植物珪酸体（プラント・オパール）分析の結果、分析対象2地点の浅間Bテフラ（As-B，1108年）直下層からイネが検出され、調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が認められた。同層の堆積当時は、ヨシ属が生育するような湿潤な環境であったと考えられ、そこを利用して水田稲作が行われていたと推定される。また、周辺の比較的

乾燥したところにはススキ属、ウシクサ族、メダケ属（ネザサ節）などのイネ科草本類が生育しており、遺跡周辺には何らかの樹木が分布していたと推定される。

文献

- 杉山真二・藤原宏志（1986）機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定—古環境推定の基礎資料として—, 考古学と自然科学, no.19, p.69-84.
 杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）, 辻 誠一郎編「考古学と植物学」, 同成社, p.189-213.
 藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（I）—数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法—, 考古学と自然科学, no.9, p.15-29.
 藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究（5）—プラント・オパール分析による 水田址の探索—, 考古学と自然科学, no.17, p.73-85.

表1 江木舞台遺跡における植物珪酸体分析結果

検出密度 (単位: $\times 100$ 個/g)		地点・試料		中央	北
分類群	学名			1	1
イネ科	Gramineae				
イネ	<i>Oryza sativa</i>			26	20
ヨシ属	<i>Phragmites</i>			46	39
キビ族型	Panicaceae type			7	13
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type			79	59
ウシクサ族A	Andropogoneae A type			72	91
ウシクサ族B	Andropogoneae B type			7	
タケ亜科	Bambusoideae				
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>			85	72
未分類等	Others			33	26
その他のイネ科	Others				
表皮毛起源	Husk hair origin			13	7
棒状珪酸体	Rodshaped			52	7
未分類等	Others			26	20
樹木起源	Arboreal				
その他	Others			13	7
植物珪酸体総数	Total			459	359

おもな分類群の推定生産量 (単位: $\text{kg} / \text{ml} \cdot \text{cm}$):

試料の仮比重を 1.0 と仮定して算出			
イネ	<i>Oryza sativa</i>	0.77	0.58
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	2.90	2.47
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	0.98	0.73
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	0.41	0.35

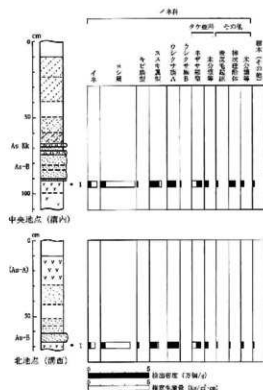


図1 江木舞台遺跡における植物珪酸体分析結果

植物珪酸体（プラントオパール）顕微鏡写真



イネ



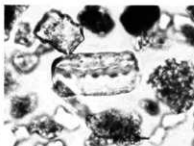
イネ



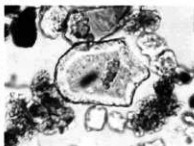
イネ



キビ族型



キビ族型



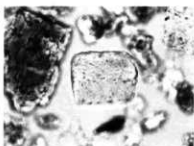
ヨシ属



ヨシ属



ススキ属型



ススキ属型



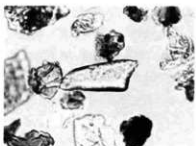
イネ



イネ



ネザサ節型



表皮毛起源



棒状珪酸体



樹木(その他)

50 μ m

写 真 图 版



江木舞台遺跡全景 南から



江木舞台遺跡全景 北から



1・2号溝全景 西から



1・2号溝全景 東から



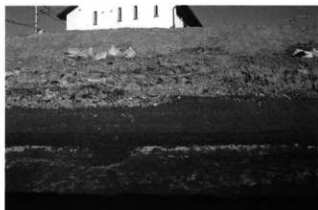
調査区北壁セクション 南から



調査区南壁セクション 北から



1・2号溝 SPA セクション 東から



東壁 SPH (2号土坑) セクション 西から



調査区西壁 SPB セクション 東から



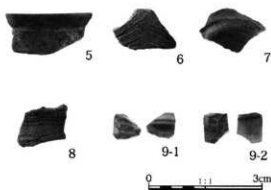
北側確認トレンチセクション (畔部分) 南から



北側確認トレンチ断面実測作業風景 南西から



南側確認トレンチ掘削作業風景 東から



報告書抄録

ふりがな	えぎぶたいいせき								
書名	江木舞台遺跡								
副書名	分譲住宅地に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書								
巻次	395								
シリーズ名									
編著者名	山崎芳春								
編集機関	有限会社歴史考房まほら 群馬県伊勢崎市東上之宮町1248-3								
発行機関	有限会社歴史考房まほら 群馬県伊勢崎市東上之宮町1248-3								
発行年月日	2017年6月30日								
所収遺跡	所在地		コード		北緯	東経	調査期間	調査対象面積	調査原因
			市町村	遺跡番号					
南原遺跡13	群馬県高崎市江木町字舞台 568-1、568-6、568-6、 568-7、569-1、570-1、 570-2		102020	689	36° 19′ 59″	139° 01′ 10″	2017.01.05 ～ 2017.01.24	188㎡	分譲住宅地
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
江木舞台遺跡	水田跡？	古代	溝4条 畔 土坑2基 ピット1基		石器 弥生土器 須恵器 土師器		As-B 直下水田跡？		

江木舞台遺跡

分譲住宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2017年6月30日 印刷・発行

編集 有限会社歴史考房まほら

発行 有限会社歴史考房まほら

印刷 朝日印刷工業株式会社